

温かい環境の中で成長していける

人が関わって、
よくなっている

国立長寿医療研究センターの回復期病棟に入院していた松井義雄さん、現在はご自宅で奥様と二人で元気に生活されています。入院中に奥様が実感されたことが、人との関りの大切さです。奥様は入院当初に寝たきりになるかもしれないと心配されていましたが、多くの人に声をかけられるようになって松井さんが変わったそうです。「周りに大事にしてくださいって人がいるのはすごい。リハビリの力を感じた。人が関わって、よくなっていく、人らしく。たくさんの人に優しく接してもらったり関わってもらったことで、本人も寝たきりの状態から人間らしさを取り戻せた気がする」と話してくださいました。



松井義雄さん (83)

介護者の相談相手



ご自宅で介護している現在も奥様の支えとなっているのは大切な人です。近くにいる妹さんや介護経験のある幼馴染に相談したり、息子さんが顔を見せに来てくれることで心穏やかになるそうです。介護で奥様的心がけているのは食事です。「入院中に栄養士に指導してもらい、自宅では色々な物と、旬の物をなるべく食べてもらうようにしています。退院指導の時はわからなかったことが、自宅で介護していくうちにコツや意味が色々わかってきました」と話してくださいました。

温かい人の関わりの中で暮らす松井さんの楽しみは、テレビのスポーツ観戦です。夜の十時に奥様が「お父さんもう寝る？」と聞いても「まだ」と答える程です。

担当看護師の一言

初めは寝たきりで鼻から栄養をいれるための管が入っていた松井さんでした。奥様も心配された様子で、もしかしたら口から食えることが難しくなるかもしれないと不安もあり、涙ぐまれる様子もありました。担当看護師としては「何とか笑顔の多いリハビリにしたい」と思い、松井さんの担当チーム（リハビリセラピスト・看護師・介護士）は、どのようにすれば松井さんが笑顔でリハビリに参加できるのか、を検討し試行錯誤しました。リハビリ以外でも、病棟訓練をチームで考え、机を拭いたり、キャッチボールをしたりして、上肢や肩の運動に取り組みました。もともとスポーツ観戦がお好きな松井さんは、介護福祉士や看護師と笑顔や時には真剣な顔でキャッチボールの訓練が出来ました。松井さんが自分でご飯を食べることができるようになった時には、チームスタッフみんなが喜びました。